The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国語の外来名表記に関する覚書 : 地名Amsterdamの意訳をめぐる議論の検討ほか
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2015, 49, p. 9-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61342
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国語の外来名表記に関する覚書

――地名 Amsterdam の意訳をめぐる議論の検討ほか――

田 野 村　忠 温

キーワード：中国語／訳名／意訳／音訳／Amsterdam

1　はじめに

『東洋学報』第 85 巻第 1 号（2003）に掲載された千葉謙悟氏の論文「地名の翻訳借用表記創造の主体をめぐって―オクスフォード『牛津』を中心に―」は地名 Oxford の意訳表記「牛津」について 19 世紀末中国の文献における特定の一用例を主たる根拠としてその発生を論じたものであるが、その最後の箇所で千葉氏は地名 Amsterdam の意訳の問題に考察を加えている。

筆者は田野村（2015）――以後「前稿」として言及する――において意訳地名「牛津」「剣橋」の使用状況を日中英の各種資料の調査に基づいて考察し、日中両国におけるそれらの地名の歴史の復元を試みた。その議論の中で「牛津」に関する千葉氏の所論の問題点にも触れたが、この小論では Amsterdam の中国語表記――正確に言えば、千葉氏が Amsterdam の中国語表記と考えているもの――をめぐる議論の誤りを指摘・訂正する。[1)]

併せて、近代中国の文献に千葉氏の記述にはない Amsterdam の意訳表記が見出されることを述べ、また、現代中国語における関連の外来名の標準表記と表記の現状、その通時的な意味合いなどの問題にも考察を加える。

2　近代中国語における関連の外来名表記

2.1　千葉（2003）の挙げる外来名表記および同類・関連の表記

千葉（2003）は地名 Amsterdam が近代中国の文献においてさまざまな形で表記されていると述べ、そのうち「阿姆士莊」のように「莊」で終わるものは部分意訳であると論じている。ここで言う「部分意訳」は筆者が前稿で用いた用語で、例えば地名Cambridgeを表す「剣橋」におけるような音訳と意訳の複合――「剣」はCam川の名の発音を写し、「橋」はbridgeの意味を表している――を指す。そして、「阿姆士莊」はその冒頭3文字の音訳と末尾の「莊」の意訳とによって構成された部分意訳地名だというのが千葉の見解である。

（1）A類・B類の表記

さて、千葉が Amsterdam の中国語表記として年代順に挙げている約 20 種類の表記のリストを一見して気付くのは、それらの表記は音韻の観点から互いに区別できるいくつかの類を成しているということである。

ここでは筆者の状況理解に基づいて各種の表記をまず A、B の 2 類に分けて示す。実際にはどちらにも属さないものがほかにあり、論述の都合上それは後で取り上げる。また、類似の表記が多いものについては適宜取捨して掲げる。なお、本稿では原則として資料からの用例の引用においては出典の漢字字体、それ以外の文脈においては現代日本の漢字字体を用いる。このため、用例と本文とで同一の語・表記が異なる字体によって表示される場合がある。

A：安特旦、安特坦、俺斯特但[2)]、安賜徳潭、阿木思徳丹、
　　恩斯徳爾敦、亜摩斯徳爾登、亜木司待爾達木

B：安思丹、阿母斯達木、
　　阿馬斯湯、阿摩斯通、阿摩斯莊、阿姆士莊

A 類の名は Amsterdam の ter を表す部分（直線の下線）と dam を表す部分（波線の下線）をともに含む。B 類の名は terdam に相当するはずの部分を 1 つ（二重下線）しか含まない。いずれの下線部も歯茎（ないし反り舌）の破裂音または破擦音で始まる。

上のように整理すると、A、B 2 類の外来名表記があることについて 2 通りの解釈の可能性が考えられる。1 つは、A 類の名は Amsterdam の発音をより忠実に表記しているのに対し、B 類の名においては Amsterdam の ter と dam の一方だけに字が当てられ、他方は省かれている、もしくは、terdam 全体が一体的に表記されているという可能性である。もう 1 つの解釈は、今我々が見ている 2 類の外来名は実はそれぞれに異なる原語を表しているという可能性である。

千葉は前者の解釈を前提として議論を展開しているわけであるが、資料に基づいて確認したところ事実は後者に近いものであった。すなわち、上で A 類として示した表記のすべてと B 類の「安思丹」と「阿母斯達木」は現に地名 Amsterdam を表すのに対し、「安思丹」「阿母斯達木」以外の B 類の表記はそもそも Amsterdam ではなく、Armstrong という人名を表すものであった。

Armstrong は 19 世紀英国の発明家・実業家である William George Armstrong（1810 ～ 1900）の姓であり、その発明、経営による大砲、工廠の名称としても近代中国の文献――書籍、雑誌記事、視察日記など――に頻出する。B 類に挙げたものと同類で、使われた漢字の異なるものも含めて用例を次にいくつか示す。用例の年は、執筆された年の分かるものについては執筆年、分からないものについては刊行年で示す。また、近代中国資料における句読点の用法は千差万別で、現代の慣用と大きく異なることも多いので、挙例に際しては必要に応じて句読点に適宜調整を施す。

塞維廉阿木士湯者 塞其爵也維廉其姓也英語謂膀臂强曰阿木士湯 聰慧善思索、精於輪船槍炮。 （劉錫鴻『英軺日記』（1877））

英國商廠曰阿弗士莊專造前膛熟鐵包鋼之炮。[3)]

（郭嵩燾『倫敦與巴黎日記』（1878））

如英之阿馬斯湯、德之克虜伯、皆天下之良工精械也。

（曾紀澤『曾惠敏公手寫日記』（1880））

西洋最著名之炮廠三、一爲德之克魯卜、一爲英之烏里治及阿母司湯。

（黎庶昌『西洋雜志』（1881））

安蒙士唐廠、筒用精鋼、身用熟鐵。

（左宗棠「請旨敕議拓增船炮大廠以圖久遠摺」（1885）、

『左文襄公奏稿』巻六十四（1892）所収）

致遠靖遠[4)]穹甲快船二艘、英國阿模士莊廠承造。

（余思詒『航海瑣記』（1890））

今西國鐵砲大廠共有四家、一在英國名遏斯敦、一在德國名克鹿卜、二在法國一名開內一名使內。

（李提摩太[5)]口譯・老竹筆述「西國近事」『萬國公報』第47次（1892））

製造廠名人兼議員大臣阿姆士脫郎[6)] 中國官文書作阿姆士莊 迎於車站、導入其家。（『李傳相歷聘歐美記』（1896））

如德之克虜伯、英之阿姆士莊以及瓦瓦司等尤爲注意。

（林樂知[7)]命意・蔡爾康遣辭「中東之戰關繫地球全局說」

『中東戰紀本末』（1896））

聞昨晚阿摩士當廠不戒於火、房間貨物器具工料等所失不下二十餘萬鎊云。（張德彝『六述奇』巻九（1899））

例中に含まれる「克虜伯」「克魯卜」「克鹿卜」はドイツのKrupp（クルップ）、「烏里治」は英国のWoolwich（ウーリッジ）を表す。両者はArmstrongとともに近代世界の武器製造界の頂点に立っていた企業、組織である。「瓦瓦司」は英国のVavasseurを指すと推定される。[8)]

上掲の諸例――『曽恵敏公手写日記』（『出使英法俄国日記』）、『李傅相歴聘欧美記』（『李鴻章歴聘欧美記』）、『中東戦紀本末』は千葉自身の挙げてい

る当該の表記の出所でもある――がいずれもオランダの都市について語っていないことは明白である。千葉は鍾叔河主編『走向世界叢書』（岳麓書社出版、1984 ～ 1986 年）の諸巻に翻字・収録された資料については各資料の後に添えられた「訳名簡釈」に挙げられた外来名をそのまま考察の材料とし、本文を参照しなかったものと見られる。しかし、訳名簡釈は記載に漏れがあるばかりか、外来名の注釈に致命的な誤りがある。[9)]

Armstrong を表す B 類の名の末尾に置かれた「湯」「唐」「荘」その他の字はいずれも trong の部分の音訳である。英語の /t/、/d/ に続く /r/ は摩擦音化することがある。破擦音で始まる「荘」の使用はそうした発音を忠実に写そうとしたものであろう。複数の要素からの択一を ｛ ｝ で示すことにすれば、筆者の調査によって近代中国の文献中に使用を確認できた B 類の Armstrong の表記の多様性は次の形に整理することができる。

{{阿 / 亜}{姆 / 母 / 木 / 模 / 摩 / 墨 / 馬 / 密 / 茀}/ 安蒙 / 遏}{斯 / 司 / 士}{当 / 湯 / 唐 / 冬 / 通 / 登 / 敦 / 荘 / 壮}

A 類の表記は千葉の考えている通り Amsterdam の音訳であるので挙例は省くが、同様に形式上の整理を行えば、観察された表記の大半は次の一般形に集約される。（　）は当該の要素が省略可能であることを示す。

{{阿 / 亜 / 愛}{姆 / 母 / 木 / 摩 / 墨}/ 安（蒙）/ 俺（莫）/ 暗 / 盎 / 恩}（{斯 / 司 / 思 / 士 / 賜}）{{徳 / 得 / 特 / 歹 / 待 / 泰 / 土}（{児 / 爾 / 耳}）/ 答 / 達 / 他 / 透 / 脱}{達{姆 / 母 / 木}/ 丹 / 担 / 旦 / 但 / 蛋 / 潭 / 坦 / 堂 / 登 / 騰 / 滕 / 敦 / 頓 / 岱 / 台 / 太 / 大}

B 類の Amsterdam の音訳は省略的で、使用は少ない。Amsterdam の ter の部分の省略と、dam の部分の省略の 2 つの可能性がある。ter を省いたものには、千葉の挙げる「安思丹」「阿母斯達木」のほか、「{阿 / 亜}姆{斯 / 士}

丹」の形にまとめられる4通りの表記と「阿末斯打姆」があった。語末のdamを省いたと見られるものとしては「昂斯特」「昂司得」の2通りの表記が見出された。ほかに、「阿姆斯達」という表記もあったが、terの省略ともdamの省略とも決しがたい。

(2) A'類・B'類の表記

千葉がAmsterdamを表すものとして挙げている外来名表記には、上述のA、B 2類に該当するものに加えて、別の音韻的な類を成す次のようなものもある。

A'：巌士達攬、安士得竜、暗士蕩郎[10)]

これらの表記は形のうえでA類に近いが、最後の漢字が/l/で始まり鼻音に終わる音節を表している。資料に基づいて確認したところ、この類の表記もB類と同じく曖昧性を有しており、「巌士達攬」は地名Amsterdamを表すが、「安士得竜」と「暗士蕩郎」は人名Armstrongを表すものであった。いずれも音訳である。

「巌士達攬」は、千葉が出典として挙げる林則徐『四洲志』(1841)のほか、それに基づいて著された魏源撰『海国図志』50巻本(1843)、梁廷枏撰『海国四説』(1846)に使用が見られる。

「安士得竜」は千葉の挙げる『格致彙編』の1877年の号の「西炮説略」と題され大砲の図の掲げられた記事に「安士得竜廠」の形で繰り返し現れる。「暗士蕩郎」はやはり千葉の挙げる『循環日報』の1880年の号に載った「試演新砲」という見出しの記事に「倣英国暗士蕩郎式様」という句の形で現れる。

造成後其形如第一圖、其架如第二圖。此炮爲英國烏里治廠所造當未成之先英國安士得龍廠內代意大利亞國造。

（「西炮說略」傅蘭雅[11]輯『格致彙編』光緒三年春季（1877））

西報論江南砲局近所鑄諸大砲、仿英國暗士蕩郎式様已鑄成十七尊。

（「試演新砲」『循環日報』光緒六年歳次庚辰四月十八日（1880））

Armstrong はさらに例えば次のようにさまざまな形で表記されており、これらもすべて A’ 類に該当する。先に挙げた用例に含まれていた「阿姆士脱郎」（『李伝相歴聘欧美記』（1896））も同類である。

地球各國槍炮廠以德之克虜伯規模爲最大、工作至六萬人、富可敵國。英國阿姆司脱郎次之。（崔國因『出使美日秘國日記』（1893））

英國阿姆斯脱郎廠武員孟格理符新製暗臺、藏炮於地。

（鄭觀應『盛世危言』（1895））

材料精益求精、雖不及德之克虜伯、英之奄士當郎、規模之大可供亞洲各國之用。（鄭觀應『盛世危言增訂新編』（1900））

阿模士特郎 威廉卓支 Armstrong, William George（中略）英發明鑄炮家。（中略）以鑄巨炮著名於世。

（張伯爾[12]原刊・山西大學堂譯書院譯『世界名人傳略』（1908））

【阿母斯特侖砲】（中略）英 Armstrong gun. 英國阿姆斯特侖會社所製之砲。[13]（作新社『東中大辭典』（1908））

居然與英之阿姆史托朗 Armstrong 德之克魯伯 Krupp 西孟士 Sremens（ママ）諸創造家齊名。

（章乃煒「俄達瓦[14]之工業」『商務官報』己酉第一期（1909））

阿蒙斯特龍之懷特沃茲[15]公司有工人二萬五千名。

（「英法俄三國之海軍兵工廠一覽表」『東方雜誌』第13巻第3號（1916））

近代中国の文献における使用を確認できた A’ 類の Armstrong の表記の一般形は次の通りである。

{{阿/亜}{姆/母/木/穆/模/蒙}/安/暗/奄}{斯/司/史/士}{得/特/当/蕩/脱/托}{郎/朗/竜/侖}

A’類の Amsterdam を示す表記は調査の限りでは「巌士達攬」以外にはない。

結局、千葉が Amsterdam の音訳ないし意訳として挙げている多様な外来名表記のうち、A 類の表記はすべて地名 Amsterdam の音訳であり、B 類と A’類の表記はその多くが人名 Armstrong の音訳、一部が地名 Amsterdam の音訳であることになる。

千葉の挙げる表記には含まれないが、A 類の変種としての A’類の存在に平行して、B 類の変種として B’類の表記も存在する。沈純『西事類編』（1884）に現れる「安蒙士郎」、胡礼垣『梨園娯老集』（1908）に現れる「暗士郎」がそれらに該当し、いずれも Armstrong の音訳である。これらの表記は Armstrong の t に相当する部分を欠いている。

以上において見てきた音訳の各類と近代中国資料中に確認できたその所属例を表の形に整理すれば表 1 のようになる。そして、Amsterdam と Armstrong の音訳表記は誤記などのわずかな例外を除いてすべてこの分類に収まる。

表 1　Amsterdam と Armstrong の音訳の分類

	Amsterdamの音訳	Armstrongの音訳
A類	安特旦、俺特坦、安賜徳潭、阿木思徳丹、安特岱、阿姆斯得台、恩斯徳爾敦、亜摩斯徳爾登、盎斯歹爾大、亜木司待爾達木ほか（多数）	なし
B類	安思丹、亜姆士丹、阿母斯達木、昂斯特、昂司得ほか（少数）	阿馬斯湯、安蒙士唐、阿摩士当、阿摩斯通、阿摩斯荘、亜姆斯壮、遏斯敦ほか（多数）
A’類	巌士達攬のみ	安士得竜、暗士蕩郎、阿姆士脱郎、亜姆斯徳朗、阿母斯特侖ほか（比較的多数）
B’類	なし	暗士郎、安蒙士郎のみ

なお、Amsterdam と Armstrong の音訳を両方含む B 類と A’類の表記を通

覧してその曖昧性の根拠を求めてみると、両類を通じてAmsterdamの音訳はピンイン表記上nまたはmuで終わり、[16] Armstrongの音訳はngで終わっている――ただし、まれに「敦」「侖」を末字とする例外的な音訳がある――ことが分かる。なお、この一般化はB’類についても成り立つが、A類にはそのままでは該当しない。A類のAmsterdamの音訳の末尾はより多様で、n、muで終わるもののほか、ngで終わるもの（末字「堂」「登」など）とdamの鼻音を省いたもの（末字「台」「大」など）がある。

（3）残余の表記――「安得堤」

千葉の挙げる表記で以上の類のいずれにも該当しないのは「安得堤」の1つだけである。

この表記は論を待たず地名Amsterdam――これは、川の名Amstelと普通名詞damの複合したAmsteldamの変化形である――の部分意訳であり、「安得」がAmsterのやや簡略な音訳、「堤」がdamの意訳となっている。

千葉が「安得堤」の出典として挙げる『外国志略』という文献は存在を確認することができなかったが、馬礼遜[17]『外国史略』（19世紀初期）にRotterdamを表す「鹿得堤」とともに「安得堤」が現れる。また、「安特堤」「鹿特堤」という表記が著者・刊年不詳の『万国地理全図集』[18]や徐継畬『瀛環志略』（1848）に見られる。

2.2 Amsterdamのほかの意訳表記など

調査の中で、地名AmsterdamとRotterdamの部分意訳には、上述の「堤」を用いたものに加えて、「塘」の字を用いたものも見出された。

次の例においてはAmsterdamが「安蒙士得塘」と表記されている。

本行有「新加坡」船可直達阿蒙士得塘。

（『劉銘傳撫臺前後檔案』（1883））

この表記だけを見る限りでは「塘」を単なる音訳と見る余地もあるが、次に示す用例に見る通り後には Amsterdam と Rotterdam は音訳部分を 1 字で表現した「涵塘」「洛塘」という形で記され、しかも、両者を合わせて呼ぶ「涵洛二塘」という表現も使われている。このことを考え併せれば両地名の「～塘」の形をした表記を統一的に部分意訳と解釈するのが合理的である。

荷蘭文報紙普遍全歐者大抵來自涵塘 Amster-dam 及洛塘 Rotter-dam。京城海牙[19]之報反覺相形見絀。

（「商務常報 涵塘（荷蘭）荷蘭文」『時報』國慶增刊（1924））

荷蘭有三大都會、一曰涵塘、二曰洛塘、三曰園京。園京卽海牙、海牙古文之意爲園。（中略）涵洛二塘與德之漢堡、比之沿塢、[20]同爲歐洲大陸最重要之港口。（中略）如涵塘原名 Amsterdam、Amstel 乃河名、Dam 卽塘之意、涵塘二字音義兼譯、洛塘亦然。

（張其昀「東西洋滄桑之感」『時代公論』第 11 號（1932））

阿姆斯得達姆之荷文原名 Amster-dam、意譯當作「涵塘」。

（「駐阿姆斯得達姆領館通訊」『外部周刊』第 72 期（1935））

第 2 の用例に言う「音義兼訳」はこの文脈では本稿の部分意訳を意味するものと筆者は理解する。この「涵塘」と「洛塘」は本来の「涵士得塘」「洛得塘」といった表記を短縮して作られたものである可能性があるが、そうした非省略的な表記の使用例は見出せなかった。

「堤」による表記はいずれも 19 世紀前半の文献中に使用が認められるものであるが、同世紀後半以後にはそれに代わる形で「塘」による表記が使われている。この交替の理由は不明であるが、あるいは「塘」は発音が dam に近いことから「堤」よりも優れた訳法と受け止められたということかも知れない。

「堤」「塘」のほかに、「垣」の字を用いた「安特垣」という表記も見られる。

荷蘭北都安特垣周三十里、有河百餘道。　（孫家穀「各國形勢類考」陳忠倚輯『皇朝經世文三編』巻七十一洋務三（1898））

この記事は陳昌紳編『分類時務通纂』巻一百九外交類（1902）に引用されており、そこでの表記も同様である。ただし、この「垣」については音訳の「坦」ないし意訳の「堤」の誤記である可能性も疑われる。「安特垣」はより古い日本資料である市岡正一編『漢語挿入新撰玉篇』（1877）にも見出され、そのことを考えれば少なくとも単なる特定の資料における誤記の類ではなさそうにも思われるが、明確な判断を下せるだけの証拠がない。

近代中国の文献には、「堤」と「塘」――可能性としては加えて「垣」――による部分意訳に一見類似した、「埠」の字を用いたAmsterdam、Rotterdamの表記も見出される。それは「愛埠」「阿埠」および「鹿埠」という形で現れる。

爲愛姆斯德丹（Amsterdam）商埠計、勢不得不力謀通海之道、以維持其固有之地位。此北海運河之所由來也。河起自北海、横截荷蘭北部而達愛埠。　（宋希尚『歐美水利調査錄』（1924））

日前阿埠商業報載稱、和俄會議雖經停頓、但兩國間之商業情形逐漸發達。　（「和俄商業關係」『外交公報』第39期（1924））

荷蘭阿埠茶葉拍賣形情【写真の説明文】

（「插圖 華茶之勁敵（二）」『國際貿易導報』第6巻第7號（1934））

考試院院長戴季陶氏乗出席伯林第十一屆世界運動大會之便、於六月二十七日（中略）由比抵和、下榻阿埠之涵江館Amstel-Hotel。

（「駐和蘭使館通訊」『外部周刊』第125期（1936））

鹿埠車站旁原有河渡、我僑商特於河之一端建一南京門、來賓上岸時、卽由該門直入中國城、組織可謂無微不至。

（「駐和蘭使館通訊」『外部周刊』第89期（1935））

しかし、「安得堤」「阿蒙士得塘」「涵塘」などの表記と「愛埠」「阿埠」などの表記のあいだには語形成の過程に関して重要な違いがある。すなわち、「堤」と「塘」はいずれも“堤防”を表し、Amsterdam の dam の翻訳として用いられているのに対し、「埠」は“埠頭”、そしてそこから転じて当時“国際貿易都市”を表し、[21] dam を翻訳したものではない。そして、「安得堤」「阿蒙士得塘」「涵塘」などの名は Amster という固有名の部分の音訳と普通名詞 dam の意訳とで構成され、その意味において原語との要素的な対応に過不足がないのに対し、「愛埠」「阿埠」などの名は Amsterdam 全体の簡略な音訳である「愛」「阿」に普通名詞の「埠」が余剰的に付加された形になっている。前者の類の表記は Amsterdam という地名を直接表すが、後者の類の表記は Amsterdam という地名に説明的な要素を加えて“Amsterdam 商埠”、“Amsterdam 国際貿易都市”のように表現し、それによって Amsterdam を表すものである。

「愛埠」「阿埠」「鹿埠」を意訳と見るかどうかは所詮意訳の定義の問題であるが、「埠」は「堤」「塘」と異なり dam を訳したものでない以上、少なくとも「安得堤」「涵塘」その他が部分意訳であると言うのと同等の意味において「愛埠」「阿埠」などを部分意訳だと言うことはできない。[22]

3　余論 現代中国語における関連の表記の状況とその背景など

3.1　Amsterdam と Armstrong の標準表記

現代中国語――ここでは大まかに 20 世紀後半以後を「現代」と表現し、そのうち特に同世紀終盤以後を観察の中心とする――における地名 Amsterdam の表記について、大陸で刊行された中国地名委員会編『外国地名訳名手冊』（商務印書館、1993 年）や台湾で刊行された国立編訳館編訂『外国地名訳名』（台湾商務印書館、1997 年）を始めとする現代の外国地名訳名辞典は揃って「阿姆斯特丹」を標準と定める。これは 2.1（1）で見た A 類に該当する音訳である。

人名 Armstrong については、新華社訳名室編『世界人名翻訳大辞典』（中国対外翻訳出版公司、1993年）、張力主編『世界人名地名訳名注解手冊』（旅遊教育出版社、2009 年）ともに「阿姆斯特朗」を掲げる。こちらは 2.1（2）の A’ 類に該当する。

3.2　Amsterdam と Armstrong の表記の現状

しかし、現実にはそれらの標準表記が固定的に使われているわけではなく、多様な表記の使用が見られる。以下に、限定的な調査によって確認できた表記の状況を述べる。なお、調査の対象は出版物に限定し、かつ、近代中国の文献からの引用およびそれに類する文脈における用例は除外する。

（1）Amsterdam の表記のゆれ

地名 Amsterdam については、まず A 類に該当する音訳としては、標準表記の「阿姆斯特丹」と同音の、「阿{母/牡}{斯/司}特丹」の形にまとめられる表記のほかに、発音を一部異にする「阿姆士特丹」「亜姆斯特丹」という表記がある。用例をいくつか示す。

作者由歐返國之日、自阿牡斯特丹起飛。

（黃樹仁『心牢』（2002）、台湾）

西方国家出版界大多委托荷兰阿姆士特丹的 Meulenhoff Bruna, N · V 公司或伦敦 Collect’s Holdings Ltd. 公司代办展出事宜。

（印永清「国际书展小史」『图书馆杂志』第7巻第6期（1988）、大陸）

到達荷蘭首都阿姆士特丹、市內河道交叉、皇宮在市區內並無圍牆環繞、一行搭透明蓋舟穿遊各水道、登岸後參觀紅燈區。

（殷銘秀「歐遊雜感」『中外雜誌』第47巻第4期（1990）、台湾）

飛吉隆坡—杜拜—亞姆斯特丹—倫敦線的 MH4 班機離開首站的時間是晚上十一時十五分。[23)]

（鄺啓新著・鄧文正譯『開放的航空業』（1989）、香港）

例如東印度公司于一六二一年、在雅加達（Jacatra）購買中國白色生絲1,556斤、運回亞姆斯特丹（Amsterdam）出售、毛利爲投資的百分之三百二十。　（全漢昇「明清間中国絲綢的輸出貿易及其影響」『國史釋論 上册』（1988）、台湾）

「阿姆斯特丹」の最後の2字を転倒させた「阿姆斯丹特」という表記の使用も散見される。混乱気味の「阿姆斯丹当」といった表記もある。単なる誤記ないし誤植の可能性も考えられるが、研究書や学術論文中にも見出され、しかも、同一の文脈における反復使用も見られることから、著者の意図通りの表記である場合もあるものと思われる。もっとも、こうした転倒や混乱は現代に始まった現象ではなく、近代中国の文献中にも観察される。

B類のAmsterdamを表す「安思丹」や「阿母斯達木」などと同類の音訳には、「阿姆{斯/士}丹」がある。「安思丹」などと同じく、Amsterdamのterに相当する部分を含まない。

著名高等院校有莱登大学、乌得勒支大学、阿姆斯丹自由大学、格罗宁根大学、鹿特丹大学（中略）等。[24)]

（『华人经济年鉴1997～1998』（1997）、大陸）

走在阿姆斯丹市區的這條河道時、我專心欣賞左岸的河流風光。

（張玉芸『走！我們去看風景』（2014）、台湾）

住在阿姆士丹的丁雄泉先生、在紐約的好友張文藝、來了香港最大樂趣除了吃、就是澡堂子了。　（蔡瀾『麻辣愛情』（2008）、香港）

歐洲的八十年戰爭（西元一五六八至一六四八年）促使大批工匠遷徙至荷蘭阿姆士丹（Amsterdam）。

（錢存訓著・劉拓・汪劉次昕譯『造紙及印刷』（1995）、台湾）

A’類の「巖士達攬」と同類の音訳は現代中国語には見当たらない。

また、近代中国語にあった「安得堤」「阿蒙士得塘」「涵塘」などの部分意

訳はすべて廃れ、現代中国語での使用は見られない。

(2) Armstrongの表記のゆれ

人名Armstrongの表記はいっそう多様である。

まず、A' 類に該当するものは標準的音訳「阿姆斯特朗」以外にも多数あり、それらはほぼ「{阿/亜}{姆/蒙}{斯/士}特{朗/隆}」という形にまとめることができる。ほかに比較的古いものとして「阿姆寿托論」もあった。

> 早在 1857 年驻华大使巴驾[25] 与美国海军舰队司令亚姆斯特朗一致认为：台湾是最值得占领的岛屿、对美国价值特别大。
>
> （刘瑞贤・武耀艳・马淑丽「台湾战略地位的历史回顾」『山西高等学校社会科学学报』（2001）、大陸）

> 民謠的其他種類、還有「大盜謠曲」（outlaw ballads）、如俠盜羅賓漢（“Robin Hood”）、亞姆斯特朗（Johnie Armstrong）或美國大盜捷西・占姆斯（Jesse W. James, 1847-82）的傳奇；（後略）。
>
> （張錯『西洋文學術語手册』（2005）、台湾）

> 巴驾接到这些信、如获至宝、一面立即转报美国国务院、一面把驻香港的美国舰队司令亚蒙斯特朗约到澳门、就这个“可能有极大的重要性的问题”秘密会谈。（陈碧笙『台湾地方史』（1982）、大陸）

> 阿姆壽托論（Armstrong）及黑兒[26] 聽到在(ママ) 救生艇的船長關在他們去討水而被捕的村落中，從此他就沒有消息了。
>
> （James W. Davidson 原著『臺灣之過去與現在』（1972）、台湾）

次の「阿姆特朗」も同類であるが、Armstrong の s に相当する部分を欠いている。

> 宇航员阿姆特朗在月亮上首次留下人类的足迹。
>
> （施琳「论美国人的民族观」

『中央民族大学学报』2001年第2期（2001）、大陸）

B類に該当するものとしては、「{阿/亜}{姆/母}{斯/士}{荘/壮/創/通}」としてまとめられる表記と「岩士唐」という表記とがある。

阿姆斯庄曾注意到、普罗提诺对本体的描述十分强调其活生生的生命和活动。（包利民「普罗提诺对柏拉图“奥秘”的解读」『浙江社会科学』2003年第5期（2003）、大陸）

1936年阿姆斯壮（Armstrong）提出增大带宽可以使抗干扰能力加强。（曹雪虹・张宗橙编著『信息论与编码』（2004）、大陸）

曾和一些大型樂團（Big bands）——班尼・莫登（Benny Moten）、萊諾・漢普頓（Lionel Hampton）、路易士・阿姆斯壮（Louis Armstrong）、伯爵・貝西（Count Basie）所領導的樂團搭配跳舞。（Rusty E. Frank著・胡思岷編譯『你不可不知的踢踏舞大明星：他們的故事（下）』（2010）、台湾）

当哈德卫与替补后卫达利尔・阿姆斯创（Darrel Armstrong）组合时、魔术队得分为＋14分。[27)]（安淑芝等编著『数据仓库与数据挖掘』（2005）、大陸）

阿姆斯通（Armstrong, 1992）给出人力资源管理的目标体系。（赵纯均等『工商管理研究备要』（2004）、大陸）

為此、亞姆斯壮（A. H. Armstrong）有感而發地說：「誠然、『愛欲』對柏拉圖[28)]而言、是人類一切思維與行動背後的原動力。」（關永中『知識論 古典思潮』（2000）、台湾）

1970年、美国岩士唐大学[29)]破天荒地将每学年只有一名的“杰出学生”的荣誉称号、授予了来自中国的这位女学生。

（邹俊「紫荆花开女儿心」『科技潮』1997年第7期（1997）、大陸[30)]）

標題 Armstrong fades 意思淺白、漢譯成“岩士唐黯然失色”、直接達意、不失爲一個好的譯文。（李德鳳『新聞飜譯 原則與方法』（2009）、香港）

これらと同類であるが特に注意に値するのは、「阿姆斯丹」という表記である。

美國的司令官阿姆斯丹、表示獨力難支、要求支援。

（高陽『慈禧全傳之五 胭脂井』（1976）、台湾）

1967 年以后举家迁至乔治亚州的沙文那、[31] 并在阿姆斯丹学院[32] 任教、撰写了一部英文版《中国文化史》。

（张品兴・刘佑生『现代中国政界要人传略大全』（1993）、大陸）

「阿姆斯丹」は、先に例を挙げたように、Amsterdam の音訳に使われている（3.2（1））。このため、現代中国語ではこの同一の表記が 2 つの異なる外来名に対応していることになる。近代中国の文献においては Armstrong の音訳の末尾にはほとんどの場合ピンイン表記上 ng に終わる漢字が使われ（2.1（2））、少なくとも「丹」の字はもっぱら Amsterdam の表記に使われていた。現代における Armstrong の音訳としての「阿姆斯丹」の使用は、Amsterdam の音訳の干渉によって生じたものであろう。地名辞典が標準表記として掲げる「阿姆斯特丹」と人名辞典の掲げる「阿姆斯特朗」は末尾の 1 字が異なるだけであり、混乱が生じるのも無理のないことである。

また、B’ 類に属する「杭思朗」という音訳もある。

飞船连同三名宇航员：杭思朗、艾德灵、柯林斯被送上地球轨道。经过四天飞行、“阿波罗”进入了月球轨道。

（肖鹤・焱如编著『读报词典』（1985）、大陸）

這個星期，美國第一位登月太空人杭思朗去世，你們應該讀過這條新聞。

（安裕『安裕周記 思前想後』（2013）、香港）

以上のように、地名 Amsterdam と人名 Armstrong の音訳は現代中国語にあっても表記に幅があり、近代における表記のゆれが今もなお続く形に

なっている。音訳に用いられる漢字のバリエーションは近代よりも大幅に減っており、その意味においてゆれの規模は縮小しているが、その一方でAmsterdamとArmstrongの標準表記間の干渉によると見られる同一表記「阿姆斯丹」の両用という、近代中国の文献中には観察されなかった現象が発生している。

（3）Armstrongの音訳「岩士唐」「杭思朗」について

Armstrongのさまざまな音訳のうち、「岩士唐」（B類）と「杭思朗」（B’類）の2つは一般に香港の慣用と説明される。

DH（2012）は、2012年8月25日の宇宙飛行士Neil Armstrongの死去に関する香港での報道で数十年前の外来名騒動が再演され、「岩士唐」「杭士朗」「阿姆斯壮」「阿姆斯特朗」などのさまざまな音訳が用いられたと述べている。

香港の『明報』紙のWebサイト（http://www.mingpao.com/）はNeil Armstrong死去直後の2012年8月27日に「文雅訳名杭思朗」と題する記事を掲載している。[33] 記事は、Neil Armstrongの訳名には少なくとも4通りの表記があり、大陸では「阿姆斯特朗」、台湾では「阿姆斯壮」がよく使われるが、香港には加えて「杭思朗」と「岩士唐」の2通りの訳名があると述べ、「阿姆斯壮」は英語の発音に近く、「杭思朗」はマスコミの慣用による“文雅”な名前であるとしている。「阿姆斯特朗」と「岩士唐」の性質への言及はない。

1969年に香港中文大学校外進修部、亜洲協会、世界中文報業協会が合同で編集・出版した『登月専門術語詞彙』はNeil Armstrongの名については「阿姆斯壮」「杭思朗」の両様の音訳を併記する形で掲げており、当時Armstrongをどう音訳するかに関して意見の対立があり、表記の統一を実現できなかったことが知られる。

「岩士唐」と「杭思朗」は香港を起源とする音訳であるにせよ、3.2（2）に用例を示した通りいずれも大陸の出版物中にも使用が見られる。そして、

観察の範囲を出版物に限定せずインターネットにまで広げれば、いずれの表記も大陸のサイトに使用例が大量に見出される。これは、香港の Web サイトの記事や文章が繁体字から簡体字への機械的な変換を経て大陸の Web サイトに掲載されることが一因であり、香港式の表記や表現が――しかも、必ずしもそれと分からない形で――大陸の中国人の目に触れる機会は過去に比べて大幅に増加しているものと見られる。

3.3 Amsterdamの標準表記「阿姆斯特丹」の成立

中国の外国地名辞典で初めて地名 Amsterdam に唯一の音訳として「阿姆斯特丹」を示したのはおそらく王雲五主編・何炳松他改編『標準漢訳外国人名地名表』（商務印書館、1934 年）である。この辞典は 1924 年に刊行された何崧齢・余祥森・夏粹若編による同名の辞典の改訂版である。初版では「阿姆斯特丹,（亜摩斯徳登）」と 2 通りの音訳が示されていた――これは先行する陸爾奎主編『辞源』（商務印書館、1915 年）の記載に基づくと見られる――が、改訂版での表示は「阿姆斯特丹」だけになり、以後に出版された外国地名辞典は一貫してそれを踏襲する形になっている。例外的に葛綏成編『最新中外地名辞典』（中華書局、1940 年）が古い音訳を挙げているが、同辞典は刊期が比較的早いうえに、先行する丁詧盦・葛綏成編『中外地名辞典』（中華書局、1924年）の記述を引き継いでいるという事情がある。

近代以来の各種の外国地名辞典ほかにおける Amsterdam の訳名の扱いを刊行年順に示せば表 2（次頁）の通りである。編者名は表示のないものもあれば、正確に書くと非常に長くなるものもあるので、一律に省く。

『標準漢訳外国人名地名表』の作成者たちが目指した外来名表記の統一の目標は必ずしもその提案通りには実現しなかったが（前稿）、地名 Amsterdam に関しては現に同書改訂版が現在にまで続くその後の標準を定めたことになる。

表2　各種外国地名辞典におけるAmsterdamの訳名

刊年	外国地名辞典名	Amsterdamの訳名
1900	Western Biographical and Geographical Names in Chinese (American Presbyterian Mission Press)	記載なし
1904	『外国地名人名辞典』（新学会社）	亜摩斯德爾登
1915	『字源』（商務印書館）	阿姆斯特丹，亦作亜摩斯德登
1920	『世界改造分国地図用 英華華英地名検査表』（中華書局）	亜摩斯德丹
1920	『世界最新地図華英地名表』（商務印書館）	亜摩斯德登
1924	『中外地名辞典』（中華書局）	亜摩斯德丹
1924	『標準漢訳外国人名地名表』（商務印書館）	阿姆斯特丹，（亜摩斯德登）
1934	『標準漢訳外国人名地名表』改訂版（商務印書館）	阿姆斯特丹
1940	『最新中外地名辞典』（中華書局）	阿姆斯得達姆，一作亜摩斯德丹
1959	『漢俄英対照常用外国地名参考資料』（地図出版社）	阿姆斯特丹
1966	『外国地名訳名』（台湾商務印書館）	阿姆斯特丹
1977	『英漢中外地名詞彙』（商務印書館）	阿姆斯特丹
1981	『世界地名詞典』（上海辞書出版社）	阿姆斯特丹
1983	『外国地名訳名手冊』（商務印書館）	阿姆斯特丹
1983	『日漢漢日世界地名訳名手冊』（中国対外経済貿易出版社）	阿姆斯特丹
1984	『世界地名録』（中国大百科全書出版社）	阿姆斯特丹
1984	『日漢世界地名訳名詞典』（新華出版社）	阿姆斯特丹
1988	『世界地名翻訳手冊』（知識出版社）	阿姆斯特丹
1993	『外国地名訳名手冊』（商務印書館）	阿姆斯特丹
1997	『最新世界地名録』（学苑出版社）	阿姆斯特丹
1997	『外国地名訳名』（台湾商務印書館）	阿姆斯特丹
2007	『世界地名翻訳大辞典』（中国対外翻訳出版公司）	阿姆斯特丹
2009	『世界人名地名訳名注解手冊』（旅遊教育出版社）	阿姆斯特丹

3.4　Amsterdamの意訳消滅とその背景

「阿姆斯特丹」という音訳が地名 Amsterdam の標準表記として定着したことは、取りも直さず従前使われていたその意訳表記の廃止を意味した。現代中国語においては、近代の文献からの引用およびそれに類する文脈を別とすれば、Amsterdamの意訳表記はもはや使われていない（3.2（1））。

この意訳から音訳への交代は、中国語における外来名表記の変遷という一般的な文脈の中で考えれば、Amsterdam の表記において生じた単なる偶発的な現象ではない。それは、19 世紀以来、中国語における外来名の表記の不統一と混乱を解消するための努力がまずは西洋人宣教師、そしてまた、中

国人自身によって重ねられ（王（1969））、その中で個別的な表記とならざるを得ない意訳が避けられ、表記の統一的な基準を定めることの可能な音訳の使用が優先・推奨されてきた（前稿）ことの結果であった。

音訳優先による外来名表記統一の努力の成果として、例えば「新堡（Newcastle）」「風索耳（Windsor）」「緑威（Greenwich）」「白山（Mont Blanc）」といった意訳地名は「紐卡斯爾」「温莎」「格林尼治」「蒙布朗」のような音訳地名に取って代わられた。そして、意訳地名の排除に取り分け熱意を持って取り組み、外来名の表記に実際大きな影響を与えたのがほかならぬ『標準漢訳外国人名地名表』であった。現代中国語には近代以来そのまま使い続けられている意訳地名や、現代になって新たに作り出されたと見られる意訳地名も少なからずあるが、「安得堤」や「阿蒙士得塘」「涵塘」はそうした外来名表記の音訳優先、意訳回避の大きな流れの中で消滅した意訳地名の事例として理解することができる。

［注］

1） 千葉（2003）の内容は実質的に同じ形で千葉（2006, 2010）に収められており、したがって本稿（および前稿）での議論はそれらの博士論文、著書に対してもそのまま通用する。

2） 千葉はこの「俺斯特但」を『地理全志』（1853）における表記として挙げているが、慕維廉編訳『地理全志』（1853）における実際の表記は「俺特坦」である（「慕維廉」は英国人宣教師 William Muirhead（1822～1900）の中国名）。千葉氏はおそらく同書の王錫祺編『小方壺齋輿地叢鈔 再補編』（著易堂、1897 年）所収版によったものと見られるが、そこでの表記は「俺斯特坦」である。

3） この用例の漢字表記は郭嵩燾他著・王立誠編校『郭嵩燾等使西記六種』（三聯書店、1998 年）における翻字に基づく。Amsterdam の第 1 の m の「弗」による音訳は不自然であるが、湖南人民出版社校点『郭嵩燾日記』第 3 巻（湖南人民出版社、1982 年）、鍾叔河主編『走向世界叢書』（岳麓書社出版、1984 年）における簡体字による翻字においても共通である。調査において資料の確認は基本的に原刊本ないしその影印本によって行ったが、この文献はそれが行えなかった少数の資料の 1 つである。

4）「致遠」「靖遠」は清国が英国に発注した巡洋艦の名。
5）「李提摩太」は英国人宣教師Timothy Richard（1845～1919）の中国名。
6）この「阿姆士脱郎」もArmstrongの音訳であるが、後述のA’類に該当する。
7）「林楽知」は米国人宣教師Young John Allen（1836～1907）の中国名。
8）「瓦瓦司」の名は近代中国の文献にときおり現れるが、Armstrong、Woolwich、Kruppのような著名な組織ではない。中国資料中には「瓦瓦司」の原名を記すものを見出すことができなかったが、当時の英米の軍事関係の書籍・雑誌を調査したところ、それはVavasseurであるらしいことが判明した。Josiah Vavasseur（1834～1908）はthe London Ordnance Works（ロンドン火砲製作所）の創業者で、King（1880）によれば中国や日本などへの武器輸出を行っていた。劉錫鴻『英軺日記』（1877）には「瓦瓦司者倫敦鑄炮商局也」とあり、上記の製作所名に符合する。また、張徳彝『四述記』巻五（1877）には「同馬清臣隨二星使乗車入老城。往觀瓦瓦斯炮商局。下車、有瓦瓦斯等六七人接迎。入內、地基不大。人工亦少。有特爲中國鑄成鋼炮五門。」という記述があり、中国に武器を輸出していた比較的小規模の企業であったことが確かめられる。なお、「瓦瓦司」「瓦瓦斯」のほかに「法華士」という音訳を用いている文献もある。
9）『李鴻章歴聘欧美記』の訳名簡釈では、Armstrongの音訳である「阿姆士荘」に対して「Amsterdam, 阿姆斯特丹」という誤った説明が与えられている。また、「訳名簡釈」への記載に漏れた表記はいずれも千葉氏の論文にも記載がない。それにしても訳名簡釈や索引のない資料についてはおそらく本文が参照されたであろうから、なぜ認定の誤りが生じ得たのか不可解ではある。
10）本文における「巖士達攬」「安士得竜」は本稿の表記の方針に基づく。千葉は「岩士達攬」「安士得龍」と表記している。
11）「傅蘭雅」は英国人牧師の子として生まれ、中国で教育・翻訳・出版に携わったJohn Fryer（1839～1928）の中国名。
12）「張伯爾」は出版社名W. & R. Chambersの音訳。『世界名人伝略』の原本は同社より刊行されたDavid Patrick and Francis Hindes Groome（eds.）*Chambers's Biographical Dictionary: The Great of All Times and Nations*（1897）。
13）Armstrongのmの音訳に「母」と「姆」が混用されているのは原文の通り。
14）「俄達瓦」は地名Ottawaの音訳。現代中国語における音訳は「渥太華」。
15）「懐特沃茲」は人名Whitworthの音訳。英国のJoseph Whitworth（1803～1887）は銃砲を含む機械製品の開発・製造で名を馳せた。ArmstrongとWhitworthの両社は1897年に合併した。
16）Amsterdamのdamに相当する部分を欠く「昂斯特」「昂司得」の音訳（B類）はこの一般化の対象外である。
17）「馬礼遜」は英国人宣教師Robert Morrison（1782～1834）の中国名。

18）『万国地理全図集』を収める王錫祺編『小方壺齋輿地叢鈔 再補編』（著易堂、1897年）は同書に関して「闕名」と表示する。最新の考証である荘（2007）によれば、英国 Leeds 大学所蔵の『万国地理全集』はドイツ人宣教師 Karl Friedrich August Gützlaff（1803 ～ 1851）によって 1843 年ないし 1844 年におそらく寧波で刊行された。そして、該書と『万国地理全図集』は同書異名の関係にあると言う。

19）「海牙」は地名ハーグ（英語名 The Hague、オランダ語名 Den Haag）の音訳。これは現代中国語でも共通である。

20）「比之沿塢」は文脈から考えて“ベルギー（比利時）のアントワープ（英語名 Antwerp、オランダ語名 Antwerpen）”を表しているものと推定される。アントワープは現代中国語では「安特衛普」と音訳される。地名 Hamburg の音訳「漢堡」は現代中国語でも同様である。

21）羅竹風主編『漢語大詞典』第 2 版（漢語大詞典出版社、2001 年）は「埠」を“①碼頭。（中略）③商埠。旧指与外国通商的城鎮。”と説明している。

22）荒川（2000）で部分意訳として扱われているサンフランシスコを表す「桑港」も「愛埠」ほかと同性質の地名の例である。ただし、「桑港」はおそらく日本人によって作られたもので――「桑港」の成立過程については荒川（1997）に詳細な考証がある――、近代日本の文献にはシアトルを表す「沙港」も出て来る。「愛埠」や「桑港」などの地名は、音訳の冒頭字と付加的な名詞の複合である点において、「欧（羅巴）洲」「英（吉利）国」式の地名やおそらく米国の日本人移民社会で作られた「加州」「羅府」「桜府」「華府」「費府」などの地名――それぞれカリフォルニア、ロサンゼルス、サクラメント、ワシントン DC、フィラデルフィアを表す――に共通するが、埠頭や港によって都市を間接的に示すという修辞の要素を含む点において異なる。なお、念のために付言すれば、「（阿）非（利加）洲」のように音訳の非冒頭字を選んだ地名もある。

23）「吉隆坡」「杜拝」はそれぞれ地名 Kuala Lumpur、Dubai の音訳。

24）「莱登」「烏得勒支」「格羅寧根」「鹿特丹」はそれぞれ地名 Leiden、Utrecht、Groningen、Rotterdam の音訳。

25）「巴駕」は米国人宣教師・医師・外交官 Peter Parker（1804 ～ 1888）の姓の音訳。1855 年から 1857 年にかけて駐華大使を務めた。なお、話題の関係上、この用例における「亜姆斯特朗」という表記が近代中国の文献における表記に従ったものである可能性も排除できない。このことは後出の「亜蒙斯特朗」の例に関しても同様である。

26）「黒児」は人名 Hill の音訳。本文に挙げた用例の先行文脈中に既出で、そこで原語が添えられている。

27）「哈徳衛」は米国のバスケットボール選手 Anference Hardaway の姓の音訳。「魔術隊」は同選手の所属するチーム名 Orlando Magic を指す。

28）「柏拉図」は哲学者名Platoの音訳。
29）この例におけるArmstrongは学校名であるが、人名に基づいている。Armstrong State UniversityのWebサイトにある校史の解説によれば、同大学は実業家George Ferguson Armstrongの遺した邸宅を利用して開設されたArmstrong Junior Collegeを母体としている。
30）雑誌『科技潮』は北京市科学技術委員会の発行する大陸の雑誌であるが、当該の記事は香港返還を祝う記事の1件で、香港のある女性実業家をインタビューに基づいて紹介したものである。
31）「喬治亜」「沙文那」は地名Georgia、Savannahの音訳。
32）注29に共通。
33）同じ記事が紙媒体の新聞にも掲載されたものと推測されるが未確認。

［文献］

荒川清秀（1997）『近代日中学術用語の形成と伝播―地理学用語を中心に―』（白帝社）
荒川清秀（2000）「外国地名の意訳―『剣橋』『牛津』『聖林』『桑港』―」『文明21』第5号（愛知大学国際コミュニケーション学会）
田野村忠温（2015）「意訳地名『牛津』『剣橋』の発生と消長」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第55巻
千葉謙悟（2003）「地名の翻訳借用表記創造の主体をめぐって―オクスフォード『牛津』を中心に―」『東洋学報』第85巻第1号
千葉謙悟（2006）『清末中国語と東西言語文化交流―外来語・欧米漢学・交流の現場―』（早稲田大学博士論文）
千葉謙悟（2010）『中国語における東西言語文化交流―近代翻訳語の創造と伝播―』（三省堂）
DH（2012）「討論 也談話“珀”」『語文建設通訊』第101期（香港中国語文学会）［同誌同号に掲載された唐雪凝・梁斌言「“珀”的読音及其他」へのコメント］
王樹槐（1969）「清末繙訳名詞的統一問題」『中央研究院近代史研究所集刊』第1期
荘欽永（2007）「郭実猟《万国地理全集》的発現及其意義」『近代中国基督教史研究集刊』第7期（香港浸会大学）［参照は荘欽永『新甲華人史史料考釈』（新加坡青年書局、2007年）に再録された版による］
James. W. King（1880）*The War-Ships and Navies of the World*, Boston: A. Williams and Company.

［付記・謝辞］本稿の 2.1 は元来前稿（田野村（2015））の末尾に配する付説として執筆したものである。前稿が当初の見通しよりも長くなったことから付説を独立させて『東洋学報』に投稿したところ、規定の分量に満たないとの理由で受理されなかった。そこで、2.2 以下を加筆して投稿し直したが、結局掲載には至らなかった。学術誌が自ら掲載した誤った学説の訂正に消極的であるのは残念なことであるが、中国語に関わる誤字の訂正についてはお二方の審査員のご指摘に負っている。記して謝意を表したい。

（文学研究科教授）

SUMMARY

A Note on Chinese Translation and Transliteration of Foreign Names with Specific Reference to Alleged Translation of *Amsterdam*

Tadaharu Tanomura

In a section of his paper 'The creators of Chinese loan-translations of foreign place names: The term *Niujin* for *Oxford*', published in *The Toyo Gakuho* Vol.85 No.2, 2003, Kengo Chiba states that the place name 'Amsterdam' is notated in a variety of ways, i.e. using various combinations of Chinese characters, in written documents of modern China, and argues that those notations which end in '莊', such as '阿姆士莊', consist of two parts, where the last character '莊' is a semantic translation whereas the preceding characters transliterate 'Ams' of 'Amsterdam'.

However, not a few of the some twenty notations Chiba cites in fact denote the personal name 'Armstrong' instead of the place name 'Amsterdam'. Chinese notations for 'Armstrong' referring to William Armstrong (1810-1900), an English inventor and industrialist, appear frequently in books, journals and diaries of inspection tours of modern China. Chiba's rudimentary misidentification makes his whole argument in question invalid. We will see here how the Chinese notations of foreign names Chiba cites constitute a few phonological classes, and how those classes are interrelated with the referents of the names.

We will also discuss some related issues, including the range of partially translated names for 'Amsterdam' as observed in documents of modern China, as well as the fluctuation of notation of 'Amsterdam' and 'Armstrong' in contemporary Chinese.